

幼児教育に携わる教師の基本的理念

森 光 義 昭

Basic Ideas of Teachers about Child Education

Yoshiaki Morimitsu

Overview

The scientific technology of our modern society is developing. Accompanied to that, the structure of the industrial society has also changed. Consequently, the sense of values of people, too, has diversified and a wide range of social problems have arisen. Student who aim to become kindergarten teachers are born and growing up in such times.

Therefore, the current style of education of children in such times needs to be examined.

This paper discusses improving abilities of the teacher and one way of thinking to cultivate ability is described.

要旨

現代社会は科学技術の発展に伴い、産業社会の構造が複雑化し、社会生活や家庭生活に大きな変化をもたらし、人々の人生観や価値観が多様化し、様々な社会問題が表出している。特に青少年の問題傾向はこのような社会の様相が起因していると思われる。そこで、このような状況の中で生まれ育った若者がこれから幼児を指導していく場合、自己の生活体験や学習経験から、教師としてどのような教育観を持ち、子供たちへどのように働きかければよいかという視点でその教育理念について述べたい。これらのことが教員養成課程の中でどのように展開されればよいかということと、教師（幼稚園教諭）としての資質を養うための大学のカリキュラムの基本的な捉え方の視座になればと考えている。

キーワード

豊かな心 人間形成 基本的な生活習慣 幼児教育 生きる力 生きた学力

1. はじめに

現代社会が目まぐるしく変化していくなか、家庭生活の様子にも大きな変化をもたらしてい

る。産業構造の変化により、就労体系は変わった。それにより3交替の時間帯勤務や生産地や市場の拡大により、単身赴任の勤務となり、家族の者が一緒に夕食を摂るということが困難になっている。また、子供たちも受験競争の過熱化や諸々の事情から時間的なゆとりのある生活から遠ざかり、塾の行き帰りにファースト・フードの食事に対応せざるを得ないなどの傾向が見られるようになってきている。そのような背景から家族の者同士のコミュニケーションが十分に取れない状況となっている。また、食生活にも変化が現れ、食事や献立も外食産業に頼るといふ傾向が出てきている。全般的に経済事情は以前よりはよくなり、快適な住空間が整備されており、家族を形成するためのハード面の条件は整いつつあるが、その中で生活をする家人が、時間的に一緒に顔を合わせる時間が取れないというのが現状である。人間形成の基礎となる躰（仕付け）は幼児期に家庭における教育として位置づけなければならないが、子供は以前と比較すると幼少の頃から家庭における基本的な生活習慣を身に付けることが出来にくくなっているのが現状である。また、現代の青少年の実態を見ると、受験競争の過熱化、いじめや不登校、十分な生活や社会体験が不足していることなど、豊かな精神的成長をしていく機会が少なくなっている。このような時代に成長した学生たちが、これからの幼児教育に携わることになるが、教師という立場の理解と教師としての資質や能力の形成の在り方の一端を述べ、授業設計の視座に供したいと考え本主題を設定した。

2. 幼児期の基本的な観点

(1) 人間の成長と環境

人間は身体を持った個体として存在している。この個体は遺伝子によって、特性を伝え、新しい個体を作り出している。その意味で、生物は遺伝子のメッセンジャーである。受精卵として始まった新しい生命は胎内である程度の成長を遂げる。胎内環境と出生後の胎外環境とは根本的に異なっている。前者は生理的環境であり、後者は文化的環境である。従来、人間の成長を規定する根本的な力は素質にあるか、それとも環境の方にあるのかがしばしば論じられている。一般的には、身体的特徴は前者によって強く規定され、精神的特質は後者の影響を深く受けている。人間にとって、その遺伝子ないし生得的な素質は運命として与えられたものであり、それを変えることはできない。そこで、精神的特質を成長させるために学習することが重要になってくる。

(2) 成熟と学習

出生直後の人間個体は、それまでのものとは著しく異なる環境に直面するが、極めて長い胎生期を終了しているにもかかわらず、新しい環境に適応する備えを持ち併せていない。つまり、新生の人間の素質には潜在的な部分が多く、それらはまだ現れていない。幼少期は潜在的な部分が多く、しかもゆっくりと成長し、人間の素質の大部分は長い時間かけて現れることになり、環境に大きく影響される。人間は成長期に関わる具体的な活動や行動がきっかけとなり、その活動によって備えられたものが素質として加わることになる。例えば、直立や二足歩行は素質の成熟であり、歩き方や走り方は学習の成果によって獲得されるものである。したがって、成長期の成熟を確かなものにするために学習するし、限られた成熟を補うために学習に「工夫」

を与えることになる。つまり、人間は素質や本能だけでは自然に適應できない。ここに教育の意味が存在することになる。

(3) 学習活動と成長及び発達

人間の新生児は未熟・無力であり、人間の子どもの有機体は自立に数年かかる。例えば直立・歩行・食・排泄などや社会的・文化的適應などはさらに長時間を要し、青少年期まで延びる。つまり、児童の未熟期からの脱出までには長い時間かかることになる。特にこの社会的適應力は、日常生活において活動・体験の積み重ねによって、結果として形成されていくものである。例えば何かの道具が使えるようになるということは道具を握れるようにならなければならないということである。従来では「素質と環境が人間を形成する」とされていたが、現在では「素質と環境に規定されながらも、活動することによって、自己を具体化し、具体的に生成していく」というのが定説になっている。人が社会の中で生きていくためにはその人間関係や文化に適應しなければならないが、その社会生活が人間を形成する。そこで人間という環境条件を利用することになる。社会生活が人間を学習させており、社会生活が人間をつくっている。ペスタロッチは「生活が人間を形成する」と言っている。

3. 幼稚園における教育の基本的立場

(1) 幼児期の生活

幼児期の人間関係の特徴としては最初、家庭における親しい人間関係から始まる。幼児にとってはこの時までには広い世界の存在認識がない。それは生活の場が家庭内という限られた空間に限定されているからである。また、家族の者との触れ合いに限られ、他者との関係についても存在認識がない。しかし、生活歴とともに生活の場が拡大されると、興味や関心が急激に広がり、次のような特徴が現れてくる。①幼児期は運動機能が急速に発達し、活動意欲が高まり、行動範囲が広がる。いろいろな場所に出掛けて、家の中→近所の公園→他の家庭→幼稚園(社会)へと広がり生活の場が広がる。また、精神的にも依存から自立に向かう。②幼稚園という生活の場は集団生活をする場である。家庭は異年齢集団であるが、幼稚園は同年代の幼児と生活する場である。そこでは、さらに興味・関心の幅が広がる。子供たちは生活を共有しながらイメージを伝え合い、お互いに影響し合いながら感動を共にする。また、言葉を獲得し表現する喜びを味わい、自分の生活を広げようとする意欲が育ち、友達と活動を展開する充実感、満足感を持つ。③幼児の自立的な生活習慣の育成においては家庭においては親しい人間関係の空間や手助けが多いが、幼稚園はいろいろな考えを持った人の集団であり、そこでは一人でやり遂げなければならない。また、一人で解決しなければならない、勝手な振る舞いが許されないなどの規範が存在し、この時、幼児なりに解決し危機を乗り越えなければならないことになる。

(2) 幼稚園教育の重要性

幼稚園は制度的教育のスタートである。幼稚園教育は全ての教育の原点である。だから当然人間形成の基礎となる。教育は時代や社会が変化してもその本質は変わらない。幼稚園教育の本質は遊びの教育化にある。幼児は遊びを通して学習し成長している。時代の変化に伴って遊びの様子が変化している。従来は自然の中での遊びであったが、近年での遊びは室内化してい

る。例えばファミコン用のゲームソフト等に見られるように遊びの室内化のデメリットは直接体験ではなく間接体験である。また、バーチャル・リアルティであり視覚と聴覚のみの遊びであり、本来の活動をしていないために創造力が育ちにくい。便利な道具は物事に気付く度合いが少なく、自分で工夫をする場面が少なく、考える力が身に付きにくい。近年の教育では特に生きる力が重視されている。この生きる力とは、判断力、豊かな人間性、思いやり、たくましさ、健康などという知・徳・体の習得であり、知識と知恵のバランスを体得することである。この教育の基本的な理念は従前から受け継がれたものであり、幼稚園教育の重要な点である。「知識は本の中にあり、知恵は生活の中にある」と言われているように自然における遊びを通じた幼児の生活そのものが学習となる。

(3) 幼稚園における学習指導

幼稚園教育の目的は学校教育法第 77 条に示されており、「幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長すること」とある。「適切な」ではなく、なぜ「適当な環境を与えて」となっているのだろうか。それは幼児期は一人一人の発達が未分化の状況にあり、発達段階的に捉えることはできない。従って、的確な計画のもとでの活動を見通すことができにくい。そこに幼稚園教育は不定型的な教育ということになる。また、小学校の教育は幼稚園教育を繋ぐものとしての「生活科」という教科の学習がある。小学校教育は幼稚園教育との連続性をもったものであり、学習の基盤から学習の基礎・基本へと定型的な教育がなされる場所である。また、教師も環境要因の一つであり、幼稚園における学習指導での教師の関わりは重要な要因となっており、環境からの影響を強く受ける時期である。幼児は環境とどのように関わったかが将来にわたる発達や人間としての生き方に重要な意味を持つことになる。教師の意図的な支えが一人一人の子供たちの生きる力としての主体性を育むことになり、それだけ教師の役割は重要な立場にあると言える。

4. 幼児期における教育の意義

(1) 教育の目的

教育を行うということは特定の主体による目的がなければならない。そして人間の作用・行為の過程において目的と方法が一對となって形づくられている。人間の活動・行為は時間的経過をたどる。しかも時間をかけて進行し、そこには結果が生じることになる。また、人間はその結果を予測して活動を開始し、有効な結果を予想する。したがって、そこには目的意識が前提としてあるということになる。さらに、人間の活動には動機がはたらく。例えば、映画を見に行くという活動を考えてみよう。面白いと言う情報が入ったとする。こうなると当然見に行こうということになる。活動には目的が伴ってくるので、目的意識を持つ活動がまともな行為であるということになる。目的意識は行為を続行する力を持っている。学習もこの作用を活用して継続させることになる。

(2) 意図的・計画的な人間形成の教育

教育には無意図的・無計画的な人間形成と意図的・計画的な人間形成の場がある。例えば、マス・メディアなどでの方法は前者であり、それは無駄が多く、非能率的であり内容に対する

課題性も含んでいる。しかもその場合は人間形成過程での結果は偶然的なものである。それに対して後者の場合は相手の望ましい成長に役立つことを意図しており、相手の望ましい目標、有効な方法、相手に働きかける活動が仕組まれており、組織的・意図的・計画的・継続的・具体的である。最近では社会生活が複雑になり、文化の内容が高度になっている。そのために社会が制度的にしかも専門的に教育するための組織が必要になってきている。そこでは人の配置、建物の設置、学習者の組織、学習の内容、時間等の決定、財政・規則などについて組織される。

(3) 教育における文化の伝達

教育のもう一つの目的として社会的同化がある。よりよき社会人になるためには社会のルールを身に付ける必要がある。そのためには青少年たちを一定の型にはめ込む教育を施さなければならない。また、一方では教育における文化の伝達の目的をもっている。この教育では第一的な環境である自然に対して働きかけながら文化財をつくりだしている。この文化について系統的に配列し、学習がなされることになる。教育にはいろいろな教育があり、1930年代にアメリカによって本質主義が唱えられた。そこでは教えることを相手がそのまま受け入れて真似るといふものであり、教えるべき事柄は教えるものの判断によって予め決められている。それが学習者に重んじられ、そのまま受け取られることが期待されている。また、教育者が権威を持ち、社会的遺産としての文化を担い、それを示し伝える立場にある。さらに、本質主義は学校教育における規律の重要性を力説した。それに対してデューイは「経験と教育」(1938年刊行)の中で経験主義を唱え、学習者の様々な活動が学習そのものとなり、知的な問題解決の学習の方法として世に消化された。

5. 幼稚園における指導の在り方

(1) 学習の基盤づくりと基礎・基本

幼稚園を選択しようとする時、「幼稚園は何をしているところだろうか」、「ここではわが子の何を育ててくれるのだろうか」などの問い掛けが基準になる。幼稚園は一人一人の幼児のよさを生かす教育、つまり、その子らしさを発揮し、「学ぶ楽しさ」を味わうことができるようにする所である。幼稚園では幼児の側に立った学習の基盤づくりをし、小学校教育の学習の基礎・基本へと連続させるようにしなければならない。しかし、そのことは早期受験教育ではない。早期受験教育ではなく、学習の基盤づくりとなるためには、幼児期にふさわしい生活を通して「その子らしさ」を開くようにしていかななければならない。このことは小学校の教育でも共通しており、知識、暗記、画一、依存、受動、競争などではなく、体験、思考、自主、創造、個性、協同等となるようにしなければならない。

(2) 不定形的及び定型的教育

幼児期は心身の発達が著しく、環境からの影響を強く受ける時期である。したがって、子供たちが環境とどのように関わったかが将来にわたる発達や人間としての生き方に重要な意味を持つことになる。また、子供たちは遊びを通して幼児が周囲の環境と主体的に関わりを持つことになる。一方では幼稚園は意図的な教育を行うことを目的とする学校であり、教師の意図的

な支えが一人一人の子供たちの生きる力としての主体性を育むことになる。

教育は不定型的な教育と定型的な教育に分類できる。前者は幼稚園における教育であり、小学校で行われる教育が後者にあたる。幼稚園教育の目的は、学校教育法77条に「幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長すること」とある。幼児期は発達段階的に捉えることができないので、いったり戻ったりの試行錯誤的な教育が中心になってくる。また、幼児は一人一人が発達の未分化の状況にあるので、不定型的な教育を行うということは一人一人を受容することにつながる。小学校では定型的な教育が行われており、幼稚園教育を繋いでいる。また、小学校教育の連続性は学習の基盤から学習の基礎・基本へと発展するものである。

(3) 幼児の主体性と教師の意図性

幼児の主体性を養うためには周囲に働きかけて発達に必要なものを獲得しようとする意欲や生活を営む態度を身に付けなければならない。そこで、この時の教師の子供への関わり方や働きかけの在り様が重要になってくる。保育の基本的な活動の主体は幼児そのものにある。活動を教師が計画して幼児にさせるという保育展開ではない。その時、教師は活動が生まれたり展開しやすいような物的、空間的、教師の関わり方、友達との関わり方などの環境の構成をしていかなければならない。幼稚園などでは教師の援助のもとで主体性を発揮して活動を展開し、幼児が自から周囲の環境に働きかけて活動を生み出すことができるようにしていくことである。つまり、幼児の主体性と教師の意図性がバランスよく絡み合っていることが重要である。そこでは併せて心情、意欲、態度等の豊かな心を育てることになる。

幼児期は発達過程の特徴として無道徳時代を過ごす。したがって、子供の思った通りのことをさせることが主体性を育てることにはつながらない。自分以外の周囲の人との関わりなしには主体性は育たない。他者との関わりの中で自分は何者かということを意識した時に育つものである。幼稚園教育の特性の一つは学習を目的としない遊びを学習としており、小学校のような綿密な計画性はない。しかし、教育である以上計画性を完全に無視することはできない。そこで、遊びの本質を壊さないで幼児の遊びを通して経験していく過程を捉える。幼稚園教育の基本的な保育の展開としては生活、計画、保育実践、評価、計画の修正、保育実践というサイクルを編むが、今、幼児は何に関心を抱いているのか、何に意欲的に取り組んでいるか、取り組もうとしているか、何にいき詰まっているのかなど、適切な教育課程、指導計画のもとでの指導を行い、幼児の主体性を育てていかなければならない。

6. 幼稚園における環境の構成

(1) 幼児の主体的な環境への関わり方

幼稚園教育は主体性を育てることが目標の一つである。主体性とは自らの考えで行動することができるようになることであり、規制の中で進んで行動することができるようになる自主性よりも進んだ行動である。現場では幼児の主体性を尊重するあまり、手出しをすることを恐れるが、しかし、このことは放任的になる可能性を含んでいる。幼児が主体的に環境に関わるとは、例えば、どんなものに興味を抱いているか、一緒に生活している友人のことをどのように思っているか、生き物、事象をどのように受け止めているかなどを環境構成の視点におき、他

の子供が遊んでいるのを見て自分の活動を作り上げていくことである。そのためには、幼児が興味を引かれるような環境構成をしていかなければならないが、ここでは教師自身も環境条件の重要な要因であることは間違いない。

(2) 環境を構成することの意味

幼児教育においては幼児が遊びを通して学習するための活動の場・状況をつくることが重要である。幼児のこれまでの体験や期待という時間的展望、興味・関心の対象や意欲などの内面性を把握し、物的、人的、自然的、社会的な条件を関連させる。例えば、「砂場で団子づくり」をする場合は、教師が砂、水、バケツ、じょうろ、皿、テーブルなどを準備し、幼児の活動に沿って環境を構成する。また、活動を学習の視点から分析し、例えば、「活動に取り組む中で育つものは何か」という視点で捉え、砂をシャベルで掘る、水を注いで泥状にこねるなど、このように環境の関わりが異なる場合、幼児の内面の動きに視点をおき、環境の構成を考えていかなければならない。

幼児の活動が充実すれば思考力が働き、感動を覚え、豊かな体験をすることができる。したがってそのためには、幼児の興味や関心の方向を探り、発達の実情について理解する必要がある。それに幼児が活動に取り組めるだけの十分な時間や場所や教材を確保しなければならない。

(3) 環境を構成するための視点

環境を構成する視点としては子供の発達の時期に即して構成しなければならない。また、幼児の生活の姿は時期によって異なり、幼児の発達の時期によって環境への興味の向け方や関わり方は変わるので、幼児の長期的な発達の見通しを持つことが重要である。

幼児の興味や欲求に応じた環境、例えば節分の日になんで活動をさせる場合は、鬼の面づくりに取り組ませるが、その時教師が準備し過ぎると、自立心が育たない、達成感が得られないなどの現象が出てくるので、そのようなことがないようにしなければならない。幼児が創意工夫をすることができるような活動をさせることが大切である。また、子供たちが行った今日の活動が明日へ、今週の活動が来週へと繋がるように幼児の生活は分断されることなく家庭での経験が幼稚園での活動に反映、幼稚園での経験が家庭での生活に反映するようにしなければならない。

7. 幼稚園における学習活動の構成

(1) 学習活動の連続性

幼稚園における学習活動は不定形的な教育であるが、子供たちの活動を幾つかのパターンで予測をし、それぞれの活動に対応出来るように計画を立て、活動が積み重ねられるようにしておかなければならない。子供たちは毎日の繰り返しの活動が学習であるので、そのことと、幼稚園で行われる遊びの学習と関連付けながら学習活動を展開していかなければならない。そのような活動を通すことによって、学習したことが日常生活に無意識のうちに生かされていくことになる。そのように仕組むことによって、幼児の生活は連続的であるので、今日の活動が明日へ、今週の活動が来週へとつながっていく。そして、家庭での経験が幼稚園での活動に反映

しました、幼稚園での経験が家庭での生活に反映されるようになり、連続性を持った学習活動が効果的になると考えられる。

(2) 学習活動に関わる教師の役割

幼稚園教育における重要な点は活動を教師が計画して幼児にさせるという保育展開ではなく、教師の援助のもとで周囲に働きかけて、発達に必要なものを獲得しようとする意欲や生活を営む態度である。保育の基本は幼児が主体的に活動することである。そこに主体性が育まれることになる。また、子供の思った通りのことをさせるのが主体性ではない。幼児の主体性と教師の意図性がバランスよく絡み合っていること。さらに自分以外の周囲の人との関わりなしには主体性は育たないし、他者との関わりの中で自分が何者かということを意識した時に育つものである。また、幼児が主体的に環境に関わりを持つようになるために、教師は興味や関心を引くような環境をつくらなければならない。その時、教師は直接的に手出しをするのではなく、自らの考えで行動できるように援助することが重要である。その場合、教師自身も環境条件の重要な一部となる。さらに幼児は他の子供が遊んでいるのを見て自分の活動をつくり上げていく。さらに、幼児が活動を充実していけば思考力が働き、感動を覚え、豊かな体験をする。充実した活動ができるようにするためには幼児の興味や関心の方向を知り、発達の実情について理解しなければならない。また、幼児が活動に取り組めるだけの十分な時間と場所、教材を確保することも教師の重要な役割りとなる。

(3) 学習活動の再構成

幼稚園における保育の展開にあたって、指導が無計画で行き当たりばったりでは望ましい方向へ行かない。活動がその後の発達にどうつながるのかという見通しを持ちながら計画・実践・評価・計画の修正・再実践というPDSサイクルを編まなければならない。また、その計画は幼児の発達に応じて月、学期、年など長期的な展望に立った計画を立てることが重要である。しかし、幼児の活動を見ていると必ずしも教師が計画したような方向に進むとは限らないので、計画どおりに実践すればよいということではない。幼児の活動の様子を観察しながら、そこで起っている事や活動の意味を考える。それは幼児の発達にとってどんな意味を持っているかを考えながら保育のなかで援助していかなければならない。また、幼児の活動はその日の活動で新たに発見したものや友達とのやり取りから生まれるものであり、それが新しい活動となる。予想を超えて活動すれば計画に合わなくなるので、その時点で再構成が迫られることになる。再構成にあたっては幼児の発達を踏まえて環境の作り変えを行うなど具体的に関わりをもって活動しなければならない。

8. 教師としてのものの見方と考え方

(1) 自分を教師として見る

教育の機能が十分に発揮されるためには教授者と学習者の関係が望ましい方向に向いていなければならない。特に低年齢にあって学習者は教授者の人格に大きく影響される。好きな先生の担当される教科は好きになり、成績も向上することはよく知られている。したがって、教師自身の感じ方・思い方・考え方が子供たちにそのまま映っている。特に人の性格的なものの中

でマイナス要因は映りやすい。自分は意識していなくても、周囲に影響を与えていることが多い。そのように意識すると責任を感じ、自分自身の生活の仕方を意識するようになる。自分の気持ちを出すためには実践記録を書き、自分でない立場で読んでみると、その中から自分が影響を受けているものは何かが見えてくる。

(2) 自分における教育観

一般的に一つの職業に就くということは言うまでもなく単なる経済的な要件を充たすためのものではない。そこには自分が仕事をすることによって社会に貢献しているのだと言う精神的な満足感を得なければならない。例えば生産事業に従事している人であれば、「よい品を安く売って、社会の皆さんに喜んでもらえることが私の喜びなんです」と言えるようにならなければならない。つまり、自分は何のために生きているのだろうか、「生きている」というためには何が大切か、「何が自分の喜びなのか」と問い続けられることである。このことはある意味、信念や意識が明確でないと自分の生き方の方向付けをすることは出来ない。自分を追及し、立派な仕事をしたいという自分の内なる願いを探り続けることが自分の将来を方向づけるための重要な課題となる。一つのことには真剣になり、自分自身の職業や教育に対する信念を持たないと一生懸命さは子供たちには伝わらない。

(3) 自分を見つめる

よく、「子供は親の言うことは聞かないが、することは真似る」と言われる。「あなたはあなたのお子さんにどんな人間になって欲しいと思いますか。」という質問に対して、「個性を生かして精一杯生きてもらいたい」、「他人様には迷惑をかけないような人間になってもらいたい」、「どんなことであろうと自分の好きな道に進んでもらいたい」などと一般的にはこのような抽象的な表現で答えが返ってくる。しかし、本音の部分では、親は自分の子供に自分自身が出来なかったことを子供に夢を託して期待するものである。親子の関係がこのような状況であるように教師と子供の間においても同様のことが言える。教師自身の性格や言動を子供たちはよく見ており、手の挙げ方まで似てくるという。教師にも、それぞれの性格がある。自分の性格、性質、考え方の癖、傾向など、長所や短所の枠を超えて自分自身を律することが重要なこととなってくる。

(4) 現実を見つめる

「過去と他人は変えられない」と言われているが、実は自分自身を変えることも容易なことではない。性格は変えられるかということがしばしば論議を呼んでいるが、根本的には変えることは出来ないのではないだろうか。人間は幸福を追求している。願いがかなった時に感じる感情が幸福感である。もし、過去に幸福を体験していても現在がそうでなければ幸福感はない。過去のことを懐かしんでも過去である。また、未来を明るく予想しても所詮予想である。過去も人も自分の思うとおりに変えることはできない。例えば、教師が子供に説諭したら勤勉になったという場合、それは子供自身の意志で行われたことであり、決して教師が変えたのではない。では、教師には何が出来るのだろうか。その答えの一つは自分の教えている事柄が好きになって教える喜びを感じることである。教育は本来無償の行為であり、愛とも共通するもの

である。相手の幸福を願うだけで自分の身を顧みないのが愛である。そこに教師としての本来の職業観が存在しているのではないだろうか。

(5) ポジティブシンキングの勧め

一般的に人間は人や物を見る時に好ましくない物が先に見えてくるものである。出来たことよりも出来なかったことの方が先に見えてくる。例えば、体育の時間の水泳で、「25メートルの端から端まで泳ぐ」という目標を置き、挑戦してみたがあと3メートルという所で足を着いてしまった。その時、多くの人（親や教師）は「あと3メートル頑張れば良かったのにね・・・」と言って、出来なかったことを取り上げたがる。しかし、そこにはその子供は22メートルも泳ぐことが出来たという事実は評価されていない。子供から見たら、自分が一生懸命努力したことへの評価がなされないことは合理的ではないと感じるはずである。ましてはこれが、「○○ちゃんは泳げたのにね・・・」と比較されるとなおさらのことである。人は皆同じことができると思いがちである。しかし、人はそれぞれ異なったものを持っている。これが個性であるが日常的にはどうしても個性があることを認識して子供に接していない。教師が子供をどのように見るかによって、子供たちの活動意欲や取り組みの姿勢は異なってくる。教師は物事をポジティブに捉える資質を養わなければならない。

9. 教師としての性格と資質

(1) 教師としての性格

教育関係の調査機関が、「どんな先生が好きですか」というアンケート調査を行った結果、幼稚園児も小学生も、「明るい先生」というのがもっとも多かった。このことは教師としての性格条件を求めたものであるが、性格は根本的には変えられないのではないかと前述したが、しかし、教師として、子供たちに接する時、教育効果を高めるための職業努力を怠ることは許されないだろう。努力するとは、自分自身の日々の生活を客観的に見ることによって、自分の生活の癖を見抜くことを指している。また、日常的には本を数多く読み、多くを考え、人からの多くの意見を聞くことによって、多様化している価値観への対応が柔軟にできるようになる。物事の捉え方として否定的に受け止めることなく、肯定的に解釈することが必要である。教師は職務上は常に冷静な判断を要求されるものであるが、人情味を併せ持つという一見矛盾するようであるが重要なことである。その他、周囲の感情に同化されないこと、特に怒りに対して激高しないことなど、感情の表現に十分留意できる力を身に付けなければならない。学校の教師は周囲からも期待されており、自分の性格を変えるとまではいかなくとも、日常的な訓練によって新しい自分というイメージをつくることはできるであろう。

(2) 人と人との出会い

教師としての資質や能力の一つに、教師自身が子供たちにどのように対応することができるかということがある。教師として必要なことは、①相手の気持ちを的確に受け止めうまく受容できること、②子供の気持ちを察して理解できるように話せること、③子供の行為を受け止め褒めて激励し、やる気を起させることなどがあげられる。このことは親と子の関係においても同じことであり、人間社会に生きる上で重要な要素とも言える。このことは常に自分の生き方そ

のものが子供たちに対して影響を与えているということになる。袖触れ合うも他生の縁と古くから言われているように、お互いが影響しあって生きている世界であるから、教師としては人との関わり合いを大切に、そのことがスムーズにできるようにならなければならない。

(3) 自分の人生観を持つ

教師としての資質を高めていくためには自分の生き方について自分自身が問えるようにならなければならない。つまり、「自分の生き方は何か」、「生きる姿勢とは何か」という命題を自分に課して、自分の教育観・人生観・職業観が語れるようにならなければならない。一般的に人は無意識のうちに人生観を持っているものであるが、自分自身を生活の中で模索していないと語ることが出来ない。例えば、①自分はこれまでにどのような生き方をしてきたか、②これからの生き方の中で大きな記憶として止まっていることは何か、③今までの自分の生き方のなかで自分自身、どんなことが好きか、などを課題として提示して自問自答を実践することが大切である。誰かが書いた書物を読むことも勉強であるが、実践してはじめて自己の存在を認識することができる。

(4) 自分自身の信念

人はだれでも人生の目標を持って生きている。目標とは自分の内なる願いであるが、それは強烈な願いであり真の欲求である。一度であきらめたものは、自分の内なる願いではない。また、目標を達成するためには自分の内なる思いに耳を傾けることである。日常生活のなかで繰り返し意識して形成されたものが信念となる。つまり、信念とは経験の中から作り上げ、積み上げられたものであり一所懸命さである。信念のなさは意識の曖昧さであり、目標に向かった自己実現は不可能である。そのためには、欲を持つことである。欲とは例えば、自分を追及し、世に名を残すような仕事をしたいというような名誉欲や自己顕示欲などを指すが、日常生活のなかで、「こんな生き方をしたい」というように自分を追及し、「成りたい自分や在りたい自分」を明確に認識することである。そこから信念は生まれてくるものである。

(5) 掛替えのない存在

Only one Earthという言葉がある。これを「単なる一つの地球」、「たった一つの地球」、と直訳しただけではそれ程の大きな意味は感じさせない。しかし、これが「掛替えのない地球」と訳すると大きな意味があることに気付く。「かけがえのない」とは欠けたら代えることができないという意味であり、子供たちは「かけがえのない子供なのだ」というのが親の願いである。このことは子の立場からみても同じであり、「かけがえのない親」なのである。親は子を選んで生んだのではない。子供も同じである。親と子の出会いは人間の意思を超えたものである。昔から、親から言えば「子は授かりもの」であり、子から言えば「親は運命的な出会い」である。兄弟姉妹や教師と園児も同じである。果たして、親や教師にそのような自覚があるのだろうか。教師として、家族を愛し子供を愛し職場を愛しているなら「自分はどんな生き方をすればよいのか」と常に問い掛けることができるはずである。

(6) 教師は人間を超えた存在

よく言われている言葉に「自分の夢を子供に託す」というのがあるが、これは理屈を超えた

親心である。教師（コーチ）が甲子園を目指して、或いはオリンピック出場を目指して選手の養成にあたることなど、それが親であり教師である。親や教師は自分の好ましように（自分がいいと思っている方向に）子供を変えようとするが自分自身を変えようとはしないものである。親や教師の愛情の表現の仕方には様々な形があるが、しかし、どんな親や教師も子供に対する愛は同じである。ここで重要なことは時代の流れのなかにあつて、ものの考え方や子供の実態の変化に伴って教師もその時々状態に合理的に対応出来る能力を身に付けなければならないということである。例えば、自分や人を信じるという場合、この「信じる」というものは、ものとして見えるものではないが、自分や人を信じるという行為は愛情そのものであり、愛情を持つということは人間の力を越えたところでの営みである。このように姿勢が見えないものがみえるようになることが教師の資質を高めることに繋がっていく。

10. 教師としての指導及び技術

(1) 教師の仕事

教師という立場はややもすると、子供が自分の働きかけに対して応えてくれるものであると信じている。しかし、すべての子供が応えてくれるとは限らない。教師は子供たちに対して要求をすることは当然のことと認識しているので、子供が教師の期待に応えてくれないと、教師と子供たちとの間に円満な人間関係を築くことが出来なくなる可能性がある。そこで、これらの問題解決力を身に付けるためには教師にも勉強が必要になってくる。教師には研究と修養の二つの側面を持っている。その中でも、教師の資質の向上を目指すという面から言えることは自分をもう一人の自分から見つめることである。修業とは本来一人きりになることである。自分を見つめることによって、現在の自分をどう変えるかが課題であるが、それは自分を見つめる過程で出てくるものである。このことは自ら働きかけないと生み出せないものである。

(2) 学習と個性の関係

一般的に勉強というものに対しては、社会的に意識の上で大きなウエイトを占めている。勉強が評価の中心を占め、勉強が過大評価され、勉強すれば社会に出てきつといいことがあると誤解されている。一般に学歴社会と言われている状況では学歴に給料は支給されているかのような誤認があり、給料のために学校に進むと考えられている。そのため、勉強は学校にいる時のものであり卒業したら勉強をしなくてよいと考えている。しかし、実際の社会では給料は仕事に対して支給されるものであり、どれだけ仕事に対する情熱があるか、どれだけ仕事をしたかが重要である。また、学校で学んでいる内容や範囲は限られたものであり、実際には社会に出てから学ぶことが余りにも多いことに気付かされる。学校で学んでいることの意義は、社会に出てから自らの力で学んでいくための基礎を養っていることにある。したがって、勉強をすることによって、自分はどのようなことに向いているか、何が出来そうかなどと模索することにある。誰もが同じような状況ではない。100メートル競争が得意な子供もいれば音楽や絵を描くのが好きな子供もいる。これが個性であるが、学習の目的は自分で個性を発見し、それを伸ばしていくための力を身に付けていくことである。タレント、プロのスポーツ選手、作家、俳優などは、自分の個性を伸ばし磨いた結果である。教師は自分の意志で人を変えることはで

きないが、その人の持っている素質を引き出してやり、伸ばすことがその役目である。ビートルズの曲に“レット・イット・ビー”というのがあるが、まさに個性の尊重を呼び掛けている音楽といえよう。このように学校で勉強をするということは、子供にとっての個性の発見の場になっている。

(3) 学習の持っている意味

教師として、学習をどのように捉えておくかということは、子供たちへの関わり方に関係してくるものである。人々は学習に対して一般的に、①学校で勉強をしておけば、将来何かの役に立つ、②勉強しておけば良いことがある、③勉強をしっかりとやればよい人間になるなどという漠然としたものを持っている。教師自身にもそのような意識があると、子供たちへの働きかけが本来の学習という目的からずれてくる。つまり、教師が勉強させることはより良い職業に就業するためのだという認識で教育すると、子供たちにそのような方向で働きかけることになる。勉強とは本来、生活に必要な技術や技能を身に付け、社会への適応力を養うためである。知識は物事の筋道を立て、導き出し、適切な判断をするための手段である。将来社会人となるための基礎・基本をつくりあげるための学習である。つまり、このことは勉強したことによって得られた知識が日常生活でいかに活用されるかということになってくる。したがって、勉強は難しいもの、勉強するのは苦しいものではなく、学問は、「常に楽しく問いかける＝楽問」でなければならないと考える。

(4) 時代と人の見方

教師として、時代や風を読み取ることのできる力は極めて重要な要件である。例えば、現在は情報化社会であるが、これらの情報をシャットアウトすることはできない。その時、むしろ情報の選択能力や活用能力を養うという方向付けが重要である。携帯電話などが絡んだ青少年の問題行動を考えた時、携帯電話を否定的に捉えるのではなく、携帯電話の利便性を前提におき、教育的な視点からの方向性を導き出し、好ましい情報媒体としての位置付けを図っていくことが求められる。つまり、時代を肯定的に見る姿勢を確立しないと物事の本質を捉えることはできない。同じように人の考え方も様々であり、様々な人が生きていることを認識し、諸々の課題を柔軟に受け止め、多様な対応が出来るような能力を身に付けなければならない。教師と教師、教師と生徒も同じである。教師自身は束縛されたくないが、生徒を束縛するのは愛情という形で行いやすい、自分の思う通りにならないと否定的にとりやすいなどの側面は教師に見られる傾向であるが、否定すれば否定し返されるし、相手を否定的に見るということはその人の生き方そのものを否定していることになり兼ねない。否定的に見ないためには、①見方の視点を変える、②ものの見方を広げて見る、③一つのことに集中してものを見ないなどが要因としてあげられる。また、人を見る場合、個人的な見方によって左右される。否定的に見ると相手も否定的に見る。非行は否定的に見られると生まれやすい。物事を肯定的に見るためには自分の中にある無意識を見つめることである。自分の中にもう一人の自分がいるが普段は隠れている。子供たちの姿は自分を写し出す鏡である。自分の精神的な修養によって、自分自身が高まり、そのことが子供（相手）に対しても望ましい成長へと発展させることに繋がるも

のである。

(5) 人間の可能性

人は誰でも可能性を持っている。その可能性が個性であるが、個性の発見と伸張は教育機能そのものである。オリンピック選手やスポーツ選手はその個性が見抜かれ、伸ばされたものの結果として捉えることが出来る。その反面、誰にでも不得意なものもある。しかし、誰もが同じことが出来ると思いついで、同じことをしようとしたり、同じ進路を取ろうとする。進学の問題にしても、「友達が行くから」という理由で同じ方向へ進む。そのことから考えて、自分の進む道は自分にも責任があるが、周囲の人々が子供たちの個性を見抜くための援助が不可欠となってくる。そのように考えると、結局自分を育てるのは自分であるということになる。そこで、自分を育てるためにはどのようにすればよいか。それは、自分の毎日の生活を顧みることである。方法は自分史的な文章表現によるノートをつくってもよいだろう。自分自身の一日の活動を人との関わりを中心に評価をし、そのことを基盤にして次への足掛かりを持つことである。このような活動を通して磨いていけば自分自身の可能性を見出すことができるだろう。

(6) 教師としての研修

教師自身が社会の変化に対応し、子供たちの実態に即した指導・援助が出来るようになるためには研究と修養に努めなければならない。特に最近の教育課題に関わる事柄についてはマスメディアを通して、自分自身の課題として捉え、課題に対する原因を探り、解決への方策を見通し、自分の意見を持つようにしていかなければならない。一度勉強したら何でも教えられると思いつくと、自分自身を伸ばすことは出来ない。本当の謙虚さを身に付けることが重要である。教師は日常的に園児の視点で活動の体験をし、活動の分析を行い、反省点を見出す活動が日々の充実感として体得できるようにすることである。自分は教師として園児（生徒）にどんなものを学習させているか、そのためには自分自身がどんなものを研修しているのかなどの意識が自分で明確にあるかなどを一日に1回は反省してみる必要がある。このことが自分の情報選択能力を高める自己チェックになっていく。

11. 幼稚園教育の今日的課題

(1) 幼児教育の基本は本来は家庭教育にある。その意味から幼稚園での教育は補完の立場をとることになる。情意面の育成についても今までは大人のストレス解消策しか考えてこなかった。幼児もストレスが発生する。悩みや不満を解消してやらなければならない。幼稚園では遊びの教育化がストレス解消の場となる。そこでは「会話」と「笑い」が幼児のストレス解消の基本となる。例えばブランコの遊びも同じ機能を持っている。そこで、子供たちの実態からくる不定形な教育という特徴によって遊びを学習として成立させるための手立てが取りにくい。しかし、遊びの教育化は幼稚園教育の中心的活動であるので、教育効果を高めるための実践が行われなければならない。

(2) 幼稚園教育は知的早教育を意味しているものではない。しかし、現実的には小学校への入学試験の準備教育が行われたりしている状況を見ると、幼稚園でも周囲の要望や期待から知的な学習に重点が置かれることが考えられないこともない。幼稚園では心の教育の基礎・基本

としていかにして感動体験を仕組み体感させるかが重要な課題となってくる。感動は生活体験の中から生まれてくるものである。感動は幼い時程家族、教師などの身近な人から受けることが効果的であるので、幼稚園の教師は人間形成の重要な担い手であるということが言える。

(3) 人間形成の基盤は本来、家庭教育が全ての教育の原点である。しかし、現実的には幼稚園が家庭教育を補強している状態であり幼児教育センター的な役割をなしている。前述したように家庭生活の変化と家庭における教育力の低下による基本的な生活習慣の定着の不備を、幼稚園においてどのような方法で教育していくかが課題となってくる。したがって、現在の幼稚園における本来の教育に加えて家庭における躰（仕付け）教育の機能を果たすことが、これからの幼稚園教育に要求されることになる。

12. まとめ

現代、幼児教育に関する教職課程で学んでいる学生は高度経済成長の時代に生まれ育っている。世の中には物が豊富に溢れ、手に入れたい物は何でも適えられる状況の中で生活してきている。以前、人々は自然と融合しながら、例えば日昇に合わせて一日の仕事が始まり、夕暮れに合わせて仕事を納めるといように自然のサイクルに合わせて生活のリズムがつくられてきた。しかし、近年の科学技術の進展は自然界に人間の欲求をぶつけて、物質に対する変質・変形を働きかけ、日常生活の利便性に目を向けた開発が行われるなど目覚ましいものがある。このことにより、特に子供にとっては遊びの道具や空間など、苦勞することなく経済レベルで生産された物を買って与えられるという方法で手に入れることができるようになった。そのことから、子供は工夫したり創造性を培う場が奪われ、遊びを学習として位置付けることは出来ない状況になった。また、遊びの形態や道具や空間的や人間的つながりも様子も変化した。以前は集団でしかも縦社会が形成された中で活動していたし、遊びの道具も自然界にあるものを自分たちの手で遊びの目的に合うように工夫しながら加工し、地域の広場に集まり自然の中で行われていた。しかし、最近ではゲームソフトなど大人が商品化したものを買って与えられ、家の中で個人的に遊ぶような状況に変化してきている。したがって、現代の若者は原体験が不足し、人との関わりについても希薄化し、コミュニケーション不足から、豊かな心を育てる機会が少なくなっている。このような実体にある若者が教師を目指す時、教師としての資質や能力を身に付けていくためには、そのような事柄に配慮をした大学のカリキュラム編成が不可欠となってくるだろう。つまり、少なくとも大学において体験学習的な学習要素を数多く取り入れて、人と人との繋がりにおいても社会思考を踏まえた学習の場が与えられ、特に学生自らの活動によって感動体験を数多く実践することによって、教師にもっとも重要であろうと考えられる豊かな心を育成することが出来るような体験的な学習を実践し、教師としての資質を高め、能力を養っていくことが重要になってくるだろう。

参考文献

- 文部省 『幼稚園教育要領』 フレーベル館 1999
- 文部省 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館 1999
- 文部科学省 『幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集』 ひかりのくに 2001
- 関根正明 『教師－自己の伸ばし方磨き方』 学陽書房 1990
- 阿部和子 『幼児期の「心の教育」を考える』 フレーベル館 2001
- 秋山俊夫・仙波克也・田中敏明 『いま、保育を見直そう』 北大路書房 1991
- 小田豊 『幼児教育再生』 小学館 2003
- 小田豊・無藤隆・神長美津子 『新しい教育課程と保育の展開－幼稚園』 東洋館 2000
- 大場牧夫・高杉自子・森上史朗 『幼稚園教育要領解説』 2000
- 工藤文三・佐野金吾・小島宏 『総則改正・中教審答申』 ぎょうせい 2004
- 厚生省 『保育所保育指針』 フレーベル館 2000
- 杉原一昭 『心を育てる幼児教育』 教育出版 2002